武蔵野幕屋　日曜聖書講筵

試煉
ヤコブ書1章1～18節

１９５７年４月７日
小池辰雄

磯浜伝道　牧会書簡　誡律的行為的な面　試煉を歓喜とせよ　栄光の御霊　神様の動力をもって　低きは高きに　生命の冠冕　神からの試煉・サタンの誘惑　試みをへたる活ける石　活ける御霊の実存　聖書は大ドラマ

【ヤコブ1】

1神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の族の平安を祈る。
2わが兄弟よ、なんじら各様の試錬に遭うとき、只管これを歓喜とせよ。
3そは汝らの信仰の験は、忍耐を生ずるを知ればなり。4忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、欠くる所なからん為なり。
5汝らの中もし智慧の欠くる者あらば、咎むることなくまた惜む事なく、凡ての人に与うる神に求むべし、さらば与えられん。6但し疑うことなく、信仰をもて求むべし。疑う者は、風に動かされて翻える海の波のごときなり。
7かかる人は主より何物をも受くと思うな。8斯かる人は二心にして、凡てその歩むところの途定まりなし。
9卑き兄弟は、おのが高くせられたるを喜べ。10富める者は、おのが卑くせられたるを喜べ。そは草の花のごとく過ぎゆくべければなり。11日出で熱き風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗しき姿ほろぶ。富める者もまた斯くのごとく、その途の半にして己まず消え失せん。
12試錬に耐うる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛する者に、約束し給いし生命の冠冕を受くべければなり。13人誘わるるとき『神われを誘いたもう』と言うな、神は悪に誘われ給わず、又みずから人を誘い給うことなし。14人の誘わるるは己の慾に引かれて惑さるるなり。15慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。16わが愛する兄弟よ、自ら欺くな。17凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は変ることなく、また回転の影もなき者なり。18その造り給える物の中にて我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに真理の言をもて、我らを生み給えり。

●磯浜伝道

この間、急に思い立ちまして、磯浜〔現在の茨城県大洗町〕に――これはまぁ例年のことではあるけれども、今年は止めようかなとも思っていたんですが――伝道に出かけました。例の如く、田崎さんの家が集会所ですが、集会を始める前に、ある人の事柄についてどうしても私は言っておかなければ、私は集会をするわけにはいかない気持でありますので、それをその人に語りました。よく納得いたしましたので、それから集会を持ちました。新しい人も2、3名見えておりました。また、古い顔では、平山君、根本君という、両方とも若い牧師さんですが、これも見えて、大変気持のいい集会が持てました。終ってからいろいろお話しているうちに夜の12時になってしまいましたが。

私はその翌日はもう家へ帰ろうかとも思っていたんですが、勝山君が急遽連絡を取ってくれて、晴嵐荘〔現在の国立療養所晴嵐荘病院の前身〕に3、4人の人と初めて私は参りました。晴嵐荘というのは、原子力研究所で有名な東海村のお隣にあるの大きな療養所です。今、収容人数が700人から800人位で、敷地も30万坪とかいうので、非常にゆったりとした、また地域的にゆったりばかりじゃなくて、規則もなかなかゆったりしているようでありまして、こちらでも東療〔国立東京療養所〕が割合にゆったりしているようですが、安静時間も大分、呑気にできているようでした。

まぁ私の名前は、無教会ではとにかく、教会でも無教会でも、いい加減知られているらしい。ところが、あそこはなかなか無教会のいわゆる聖書研究会のグループがしっかりと構えているところでして、無教会の先生方もちょいちょい行ってお話をなさるようでして、私が行ったというので、

「どうもあれは聴かない方がよかろう」

という角度の人が大分多いので、そのような人は私の集会には出てきませんでした。まぁこれは一つは時間的余裕もなかったということも原因でしょうけれども、然るべき集会所という所なしに、ある大部屋に行きまして、そこに集まってきた10何人かにお話しました。それは大体、女の方が主で、二回にわたってお話をしました。ともかくも、在来の無教会の方々には嫌われました次第です。これは大体、想像がつくところなんですが。けれどもその中に、

「一体、小池というのはどうなんだろう?」

というようなわけで、聞きにきた無教会の方も幾人かありました。ところが、話を聴きまして、事実、みんな喜んでしまった。事実が証明するので、まぁ仕方がないわけです。もう帰りは非常に名残りを惜しんでくれたような次第でした。

初めて晴嵐荘で、少数ではありましたが、大変気持のいい会でした。教会・無教会いろいろな人がいて、特に晴嵐荘の側で執り成してくれたのはむしろ教会の人でした。私は勿論、無教会の先生方のお手伝いに来たので、そういった気持で、決してそこに紛争をまき起こ

したり、争ったり、こちらを主張したりという気持は毛頭ない。私は申し上げている通り、主義・主張・立場はなんにもありません。ただカトリックでも、プロテスタントでも、皆が同じくいうところの聖書に忠実ならんと欲するだけで、その忠実ならんと欲することを、私の啓示（しめ）される角度において、していこうというわけで、全くパリサイ的な角度のすっかり抜けた気持から、そういった角度のお話をしたものですから、大変みんなも、

「これじゃ、思い違いをしていたなぁ」

と、いったように感じた人が確かにあったと思われます。

とにかく、私はお説教しているんじゃないので、皆さんと一緒に、聖書の言葉に捉（つか）まえられるというだけのことであるというわけで、

「どのようにして聖書を読むべきか」

という気持も大分、耳新しく、目新しく見、また聴いて、感じたらしいと私は受けとりました。まぁ、そんな集会、伝道をして帰ってきましたので、一応、皆さんにご報告するわけです。

●牧会書簡

今日はヤコブ書に入ります。これはドイツ語で

“kirchen Briefe”「教会書簡、公同教会書簡」

といわれる七つの書簡の一つです。即ち、

ヤコブ書、ペテロ前・後書、ヨハネ第一・第二・第三の書、及びユダ書

という、この七つを「牧会書簡」とか、「教会書簡」とか、あるいは「カトリックの手紙」「教会の手紙」といわれている。カトリックというのは、

「公同」“allgemeingültig”〔普遍妥当〕

の意味で、

「一般に共同にあてはまるところの福音」

ですね。公同的な全体に対するものです。その

「カトリックの手紙」

という言葉が表わしているように、牧会書簡というのは、キリスト教の真理を一般的に、普遍的に、いつ誰にも、どこの教会にもあてはまるといったような、少し悪くいえば観念的に――観念的と言っては悪いけれども、そういった具合に――教えられている、誡（いまし）められている「教え」であり、「誡め」であるといったように、一般に学者がこの内容の性格をとっている。大体、そういう性格のものと見ていいでしょう。

パウロの書簡は

“gelegenheit Briefe”（事情に応じた手紙）

といって、その時その時にのっぴきならない事情に迫られて、パウロが決河の勢いの如く

書いた――この前やったガラテヤ書なんか正にその通りです――その折りその時の特殊内容をもって、特殊な相手に対してパウロはぶちまけてものを言っている。それがパウロの書簡の個性です。

ところが、この「公同書簡」の方は、いわゆる「誡め、教え」というような少し落ちついた角度の、いわば祭司的な角度です。即ち、パウロの書簡が預言者的な角度というならば、この公同書簡、教会書簡は祭司的な――「教会」という言葉と「祭司」という言葉が相通じるような気持をもっているように――性格的に祭司的な書簡であると見ていいわけです。

パウロの書簡は非常に具体的であり、また特殊的であり、また一回的である。しかしながら、その具体的、特殊的、一回的なパウロの書簡は、勿論そこに如何なる時代に対しても非常に力強い、その特殊性を通して本当に普遍的なもの、永遠的なもの、一回性を通して何回もそこにいろいろな場合にやっぱりそれが訴えてくるところの性格がある。具体性を通して、我々の具体的に現われてくる人生に語りかけてくる書簡です。その意味においてパウロの書簡はかえって訴えてくる。

ところが、一般に誰にでもあてはまるように言われているもの（公同書簡）がかえってやっぱり力が薄まるといったキライはなきにしもあらずで、いったい誰でも「教え」とか「誡め」とかいうものは、人間あまり好まない。

だから、私は「教師」という字は厭いなんです。教師なんていうのはいやです。一緒に学ぶのです。私もやっぱり学徒でありまして、死に至るまで私は学ぶ徒輩でありまして、教える徒輩ではない。

無教会が預言者的であって、教会が一般に祭司的な角度であるというようなことも、ある角度からは言える。しかし、本当の祭司、本当の預言者は、これは一つなんです。ある時はその人は預言者となり、ある時にはその人は祭司であり得る。そのどちらでもなければ、実はこれは本ものではない。キリストは預言者といわれて、祭司とはあまり言われなかったけれども、しかし、

「キリストは大祭司である」

とヘブル書で言われている通りです。静かな何でもない時には祭司的であり、一端緩急あればというような時には預言者的といったようなことでありましょうけれども。

預言者的な書簡と、祭司的な書簡との両方が新約聖書にあるということは勿論、新約聖書が全きものであるということの、自然にその性格が出ている。キリストの福音書を見ると、ものすごく預言者的な言葉と行動が出ていると同時に、また祭司的な教えも勿論ある。

ヤコブ書の一番先に、

1神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の族（やから）の平安を祈る。

とある。この「散り居る十二の族（やから）」というのは一体どういうのかということで、またいろいろ説もあるわけですが、第一このヤコブとはどういう人かという問題があります。

新約聖書には、「ヤコブ」という名の人は四人いる。

「ゼベタイの子ヤコブ」

は、ヨハネの弟であるところのいわゆる「使徒ヤコブ」という人です。マタイ伝10章、マルコ伝5章、ルカ伝6章、使徒行伝1章に出てきます。それから、

「アルパイオの子ヤコブ」

というのが、マタイ伝10章にちょっと出てくる。それから、

「キリスト・イエスの兄弟ヤコブ」

というのがマタイ伝13章、マルコ伝6章、ルカ伝1章、2章、9章に出てきます。第四には、

「使徒タダイの父であるところのヤコブ」

これもマタイ伝10章、マルコ伝3章、ルカ伝6章――これはみんな十二使徒のことが出ているところですよ――そこに出てきます。

「ヨハネの弟であるヤコブ」

は、紀元44年頃に殉教の死を遂げている。それで時代的にいって、この人は少し無理だと。ヤコブ書というのはもう少しあとに書かれたものであって、勿論パウロの書簡よりもあとですから。パウロの書簡は一番早くたって紀元50年前後ですから、ちょっとこれは無理だというわけです。結局、

「主の兄弟であるヤコブ、即ちエルサレム本山の大黒柱であるところのヤコブが書いたんだ」

というのが大体の説でありますが、しかしそのヤコブに権威づけられたところの

「後の誰か、無名の人の作である」

というのがまた新しい学説で、学者がむしろとりたがるところの説です。

ちょうど、「ダビデの詩篇」なんていったって、ダビデが書いたんじゃなくて、ダビデに権威づけて言われたのであり、また、「モーセの書」というものも、これもモーセが書いたのではなく、モーセの名前をもってそこに権威づけるということがよくあることですから、その意味において大ヤコブ――エルサレム本山のヤコブ、ヨハネ、ペテロはその三人柱みたいなものですから――

「そのヤコブに名を借りたのだろう」

というのもあります。しかし、キリストの兄弟ヤコブと見てよかろうと思いますが、結論は出てきません。というのはここに、

「キリストの僕ヤコブ」

なんて書いてあるものだから、兄弟であり且つキリストの僕――それは勿論、信仰の世界では僕でありますけれども――「僕ヤコブ」と書いてあって、それが兄弟というと、「これはちょっと?」なんていうことで考えるわけです。だから、あるいは無名の人の作であるということが、歴史的には一番本当かも知れません。まぁそれはどうでもいいです。

時代はいつか？　ということもはっきりしない。紀元2世紀から3世紀、まぁ大体2世紀と見ていいでしょうけれど、2世紀から少しあとの方へ数える人は

「3世紀頃のものである」

と言っています。

キリストの兄弟のヤコブのことは、福音書の外にもありましたね、コリント前書15章7節、ガラテヤ書1章19節、2章9節、12節というところに。

●誡律的行為的な面

このヤコブ書はそういった誡律的な、行為的な面、

「誡め、教え」

という面が強く出てきて、「信仰」ということが土台に強く出てこない。「十字架・復活」なんてことも殆ど出てこないでしょ。キリストの名前が本格的に出てきたのは二回くらいしかない。

そのようなところから、ガラテヤ書を非常に強調するマルチン・ルターはこのヤコブがエルサレム本山のヤコブであると解釈しましたから、そしてこれはそもそもガラテヤの諸教会にむかって

「十字架の信仰だけではダメだ。それにユダヤ的な律法の行為が大いに必要である」

というエルサレム本山の性格がこのヤコブ書には確かに言葉の上からは、文字の上からは表れていますから――

「これは福音を薄めるものである」

という角度でこのヤコブ書というのを非常に不愉快に思って、彼はこのヤコブ書については註解を書かない。そしてドイツ語の聖書にも順序からいっても一番後になっている（例の大きな聖書をめくりながら）。ヤコブ書のあとにユダ書だけありますけれども、黙示録はいうまでもなく一番あとですけれども、ヤコブ書はずっとあとの方に来てしまっている。ペテロ前・書、ヨハネ第一・第二・第三書簡よりもあとにしてある。これもそうです（机の上のドイツ語聖書を指して）。ドイツではみんなそうなっている。ルターがこういうことをした。

「藁（わら）の書簡、藁みたいなものだ」

と言っている（笑）。勿論、ルターはこの中で、祈りのことや試煉のことについてはある程度の評価はして、そこにアンダーラインを引いたり、太い文字になっているところもありますけれども、大体ルターはこのヤコブ書を評価しなかった。それは、ある角度からはルターの気持もよくわかるわけですが。

私たちはこれを如何に掴（つか）んでいくかということを、これから一緒に学んでいこうというわけです。

ある人は、

「このヤコブ書はキリストの兄弟であるだけあって、非常にキリストの山上の垂訓と相応じたものの言い方をしている」

というので、比較してあげてあるのがありますから、ちょっとご参考に掲げておきましょう。

ヤコブ書の1・2、1・4、1・5、17、1・22、2・10、3・18、4・12、5・1以下、5・10、5・12。

マタイ伝の5・12、5・48、7・7、11、7・24以下、5・17以下、5・9、7・1、6・19、5・12、5・34以下。

という具合に列挙しておりましたが、それは山上の垂訓を一つの

「教え、誡め」

と見れば、そうも見れるのであって、ヤコブ書がそれと相通ずる。

どちらにしろ、これはたしかにユダヤ教の伝統が非常に強いということだけは争えません。ただその伝統が果たして――これはこの次の話になりますから、今日はしませんけれども――

「信仰と行為というのがバラバラに考えられているか、あるいは、もっと密接に深く溶かされているか」

ということは、今度は読む人のあれによっていろいろになってきます。

そういうわけで、この「誡め」「教え」というところから、あるドイツ語の本には、

「このヤコブ書というのは、その重点が倫理にあるのであって、神の倫理、兄弟の倫理、また最後の審判に関わるところの審判倫理といったようなことに関わって書かれている。信仰よりも行為に重きが置かれてある。その点はむしろキリストの教えに直接には近い」

という。そうすると、

「キリストは行為を教え、パウロは信仰を教えた」

なんて、簡単に考えては困るですよ。ただ学者がそういうように一応、外側からつかまえて言っている。それはその範囲においては正しい判断でもありましょうけれども。

●試煉を歓喜とせよ

それでは、本文に移ることにしましょう。

1 **神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の族（やから）の平安を祈る。**

「十二の族（やから）」というのは、

「イスラエルの十二の族（やから）、即ちユダヤのイスラエルの十二の族をそのまま示しているんだろう」

と言う人もあるし、これは十二の族といって、

「当時のユダヤ人にしてキリスト教に帰依したところの、そういったユダヤ人クリ

スチャンの全体、総体に対して言っているんだろう」と。まぁあとの方でよろしいでしょう。これをユダヤ人も異邦人も、全部をひっくるめての十二の族と、そこまで広めなくてもよさそうですけども、もうそうなると、「十二」という言葉がちょっと浮いてしまうわけですから。要するにいわゆるディアスポラ教会、諸方に散っているところのユダヤ人のキリスト教の帰依者たちですから、非常に“allgemein”「一般」なわけです。その人たちの

「平安を祈る」

のこの「祈る」は「カイロー」という字で、むしろそれはその人に「祝福を与える、喜びを贈る」というような気持もまざっているので、挨拶「カイレイン」です。

「この書簡はエルサレムで書かれたのだろう」ということをちょっと言い落としましたが、それはそれでいいでしょう。

2わが兄弟よ、

この「わが兄弟よ」という言い方が1章16節、19節、2章5節、4章11節、5章7、9、19節と、しばしば出てまいります。ヨハネ書簡にもよく出てきます、「兄弟よ」という言い方が。非常に親しい言い方で、そういった教団的な、まとまりが非常に強くなっていたと見られるわけです。この言葉は勿論、複数で、

「わが兄弟たちよ」

ですが。

なんじら各様（さまざま）の試錬（こころみ）に遭（あ）うとき、只管（ひたすら）これを歓喜（よろこび）とせよ。3そは汝らの信仰の験（ため）しは、忍耐を生ずるを知ればなり。4忍耐をして全き活動（はたらき）をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、欠くる所なからん為なり。

一番先に何が書いてあるかというと、

「なんじら各様（さまざま）の試錬（こころみ）に遭うとき」

とある。一応この教団的なものができ上がって、様々な試煉に遭う。背景がそういった外的ないろいろな、「グノーシス」いわゆる知的な角度の神秘宗教や、知的な哲学やなんかの、そういった角度の、その当時の思想や宗教に対するところの――それはパウロの書簡にも、パウロのエペソ書、コロサイ書あたりもそれとの関わりが一応考えられるわけですけれども――そういった信仰上の試煉、また実際、信仰上の、信仰の本筋の上の試煉と、それから今度は実践生活における試煉といったいろいろな試煉があるわけです。そういう、

「なんじら各様（さまざま）の試錬（こころみ）に遭（あ）うとき、只管（ひたすら）これを歓喜（よろこび）とせよ」

と。試煉に遭って――「遭う」という字は本当はもっと強いんです。試煉に「陥（おちい）る」というような字です――

「試煉に陥ったときに、それをもっぱら歓喜とせよ」

と。なかなか言い方が面白い。試煉に遭ったらそれを歓喜とせよという。ここらにやっぱりヤコブの信仰の強さが表れている。「試煉を警戒せよ」とは言わない。試煉に遭って、

「その試煉を歓喜とせよ」

と言うんですから。

●栄光の御霊

例えば、ロマ書の5章3節を見ますと、

「3然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、4忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。」（ロマ５・３～４）

とある。「患難をも喜ぶ」という。

アッシジのフランシスにしろ、サンダー・シングにしろ、みなこの試煉、患難をむしろ歓喜としていた人で、フランシスなどは貧を喜びとしていたような人でしたね。患難を喜ぶ。バンヤンの『天路歴程』の中にも、この試煉のことがたくさん出てきます。

そは汝らの信仰の験は、忍耐を生ずるを知ればなり。4忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、欠くる所なからん為なり。

今のロマ書と似ていますね。「信仰の験は」の「験」という字は「ドキミオン」という字ですが、これはもともと何か金属を試験するのと同じ字です。ペテロ前書1章7節を見ると、これも同じ牧会書簡ですが、

「7汝らの信仰の験は、壊つる金の火にためさるるよりも貴くして、

これと同じ言葉です。

即ち、錬金的な験しが、この「験」という字のもとなので、

イエス・キリストの現れ給うとき誉と光栄と尊貴とを得べきなり。」（ペテロ前１・７）

と。それから、ペテロ前書4章12節に、

「12愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、

「火のごとき試煉」ですね、

13反ってキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、

ここにも「喜べ」とあります。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留り給えばなり。」（ペテロ前４・12～14）

非常に著しいところです。何故、彼らが艱難、試煉において喜び得るか。「喜べ」と言ったっ

て、これは――ただ学者が、これは「教え」だとか「誡め」だとか一応、文句の上ではそう言ったっていいですよ。けれども、単なる「教え」や「誡め」というようなことで、この書簡全体の性格をとられては実は困る――何故、こういったことを言って、「喜べ」なんて言ったって、いい加減な教えや誡めで「喜べ」なんてことが言えるものじゃないんです。「喜べ」と何故このペテロやヤコブが言えるかというと、ペテロ書のそこにある通り、

「栄光の御霊（みたま）すなわち神の御霊なんじらの上に留っているからである」

と。このペテロ書の

「栄光の御霊」

ということは、よく捉（つか）まえておいてください。栄光の霊、光の霊です。神の栄光の霊が留まっているから、そういった試煉に遭うときに、本当はその試煉にもう勝っていける。勝っていける自信があるんです、この栄光の御霊があるから。だから、喜べるんです。それがなかったらば、喜べない。

殉教の死を遂げていったこの紀元2世紀、3世紀頃の非常な迫害を受けたクリスチャンたちが焼かれつつ――正に試煉です。この試煉（こころみ）という言葉はもともと金属が火に遭って鍛煉されるから。日本刀も鉄が焼かれてまた水の中に入れられて――火に遭ったり水に遭ったりして、鍛えられていく。それが正に鍛煉でして、「煉」という字は火偏に書く。火によって身体が焼かれつつもなお讃美歌を歌って喜びつつ逝ったという。これは男も女もそうであったという彼らは、なんといっても御霊の中に入っていたクリスチャンであった。

「長崎の二十六聖人」というのもそうです。私はあそこの大浦教会で、まだ原子爆弾の前にそれを見て来ましたが、それはそれは深刻な像です、絵です。

試煉に遭うとき、ひたすらこれを歓べという。果たして、

「これを喜びとせよ」

と言われて、

「喜べとはどうして喜びとすることできるんだろうか？」

ということが本当に受けとれないで、

「ハァ、『喜びとせよ』ですか、そうですか」

じゃどうにもならない。「喜びとせよ」というのが何故、私たちが喜びとしてできるかということは、今日やる終りの方にくると、それがはっきりしてくる。

●神様の動力をもって

4 忍耐をして全き活動（はたらき）をなさしめよ。これ汝らが全くかつ備りて、欠くる所なからん為なり。

なかなか要求が強い。この「全く」というのは「テレイオス」という字で、汝らが「終局まで満たす、終局を得るように」

ということ。「全く」とのは「目的、終局を得るように」です。また、「備わりて」というのは現在において

「いろいろな面が完備すること」

を「備わる」という。目的順に終りまでしっかりと完結するということと、現在において如何なる事に対しても備わっているというその二つです、

「汝ら全くかつ備わりて」

というのは。

「欠くる所なからん為なり」

即ち、百戦錬磨です。どういうことにおいても、どっちからどう切り込んでこられても、これに受け太刀ができるようなのが「備わり」の方で、そして遂にこれを突破して、最後まで勝ち抜いてしまうというのが「全く」の方です。

これには、いわゆる「自分の信仰」というようなことではダメです。常に勝つところの、

「勝ち得て余りあり」

とパウロが言ったところの、何ものかがそこに内在していなければ、この

「全く且つ備わりて」

なんていうことはできないわけなんです。

5 **汝らの中もし智慧の欠くる者あらば、咎(とが)むることなくまた惜(おし)む事なく、凡ての人に与うる神に求むべし、さらば与えられん。**

「咎むることなく」というのは、

「小言を言わないで」

ということ。「惜しむことなく」というのは、

「きれいさっぱりと、単純に」

です。神様は誰にも万人に与える。

「なんにも咎めだてをせずに、もう全的に惜しむことなく与え、すべての人に与えてくださるところの神様に求めたらいいだろう、智慧の欠ける者があったならば」

と。その欠けた智慧はそういった、

「神様に求めたなら、さらば与えられん」

一切その神様から戴けるということ。

6 **但し疑うことなく、信仰をもて求むべし。**

その求め方、そういった惜しみなき、咎めなき神様に、疑うことなく信仰をもて求むべしと。「疑う」という字は、例の分裂分離という字ですから、

「分裂した心がなく」

ですよ、「疑うことなく」ということは「分裂、分離なく」です。分裂心がいけない。

「こうだろうか？　ああだろうか？」

と、何かそこに残している気持がいけない。

「分裂、分離の気持なく」

です。あとで

「二心（ふたごころ）」

という言葉があって、相応ずるようなわけですが。この「分裂」の方は「二心」とはちょっと違いますけれども。この「疑うことなく」ということの一番いい例は、なんといってもあのマタイ伝14章22節以下ですね。

「25**夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、**26**弟子たち其の海の上を歩み給うを見て心騒ぎ、変化（へんげ）の者なりと言いて懼（おそ）れ叫ぶ。**27**イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安かれ、我なり、懼るな』**28**ペテロ答えて言う『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて御許に到らしめ給え』**29**『来れ』と言い給えば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く。**30**然（しか）るに風を見て懼（おそ）れ、沈みかかりければ、叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』**31**イエス直ちに御手を伸べ、これを捉（とら）えて言い給う『ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑うか』**32**相共に舟に乗りしとき、風やみたり。**33**舟に居る者どもイエスを拝して言う『まことに汝は神の子なり』」（マタイ14・25～33）

これは「懼（おそ）れ」だったな。懼れだけれども、まぁいいです。

「**心安かれ、我なり、懼（おそ）るな**」

と、キリストが言われた。ペテロが、海を渡ってきたキリストに向かって行ったところが、風を見て、

「さぁ果たしてキリストのところに行けるか？」

と。海の上を渡って行ったんですけれども、懼れ疑ってしまった。心が分裂してしまった。それは本当の信仰ではなかった。そこで、ペテロは沈みかかった。そしたら、

「**信仰うすき者よ**」

と、キリストに叱られてしまった。

疑う者は、風に動かされて翻（ひるが）える海の波のごときなり。

と。心の分裂する者は即ち、ペテロが風を見て懼れたというのは、ちょうど海の波のように彼の心がなってしまって、動揺したでしょ。海の波のように動揺したから、沈みかかってしまったんです、波の中に。ちょうどペテロの心の波と外側の波とが、そこで合ってしまっているわけです。外側に感情的な波が立っても、一番奥の魂が、ちっとも波が立たないで、ぐっと支えていかなければね。何も

「木石の如くあれ」

というのではない。人間はいろいろな外界の刺激や試煉に遭うと、いろいろ波を生ずる。けれども、その波はちゃんと

「内側から逆に静めてしまうような力を持っているかどうか」そこが大事です。

「全然、逆波も立たないような木石となれ」

という、もう全く何にも――禅宗かなんだか知りませんが、まぁ禅宗だってそうじゃないと思いますけれども、しかしちょっと仏教の角度にはそういうのがある――喜怒哀楽、一切から超越してしまって、無感覚の状態に入るんですから。これはいろいろな感覚は人間的にいくら受けても、なおそいつを内側から逆に静めてしまう。いくら外側で波が立っても、内側にはあだ波が立たないというのが本当の境地ではなかろうかと思います。

海の波のごときなり。

と。内側が全部これ海の波の如くなってしまって、分裂してしまったらば、ダメだと。

7 **かかる人は主より何物をも受くと思うな。8 斯かる人は二心にして、凡てその歩むところの途定まりなし。**

「試煉に対して内側はお不動さんの如くに不動であれ」

というわけです。内側は不動でまた分裂しない。

外に対して不動なる者は、この神の霊に対しては――不動というと、なにかいわゆる修養で不動というようなのは東洋的な不動ですけれども――不動が霊においては本当に霊に動じているわけです。霊の波には乗っかっています。霊の波には乗っかっているが、よその波には乗っかっていない。霊に対しては本当に動である。そうして、外に対しては不動である。これが本当に力ある動なんです。外に対して逆にこの動が動いている。だから、そいつを荷なっていく、征服していく。

「いや、何にも無感覚、影響を受けない。この通りでござい」

といって、ただじっとしているんじゃない。いろんなものが来たらば、そいつに対して逆な作用をこっちから起こしていく。

キリストは、波が逆巻く中で眠っていらした。眠っていたことは、神様の霊の中に乗っかってしまっているから、彼自身は不動なんだけれども、

「静まれ！」

と言ったら、波は静まった。内側から「静まれ！」という驚くべき作用が働く。そうすると外の波は静まってしまった。即ち、内側にものすごき動を持っています。ものすごい動を、力を持っています。これは「動」というより「動力」だ。ものすごい動力を持っている。これは神様の動力ですから、「静まれ」と言ったら静まってしまったでしょ。

日蓮は佐渡に渡るときに、波を

「南無妙法蓮華経！」

で静めた。あれは日蓮の信仰があそこでは正に動的な力を持っているわけです。

そういった神に対しては真の動である。しかし、横側の外のいろいろな波風、試煉に対

しては不動である。不動であって、逆に外を支配しているというなのが本当に、

「試煉を歓喜ぶ」

ことができる。

「ハハァー、いろんなものが来たな。よし、私はそれを征服して、これを神の支配下に乗せていこう」

と。神の栄光が現われる機会ですからね。神様の栄光が現われる、力が現われる機会ですから、これを喜ぶ。歓喜というのは非常に積極的な気持ですから、それをただ耐え忍んで――ここに「忍耐」という字が書いてあるけれども――ただ忍耐、耐え忍ぶだけではダメですよ。

「忍耐をして全き活動をなさしめよ」

と書いてある。面白い言い方をしているね、「忍耐をして全き活動をなさしめよ」と。即ち、消極面と積極面との両方をちゃんと持っている。積極面というのが内にある。福音の世界はどう考えても、これは積極的な世界です。

●低きは高きに

9 卑き兄弟は、

「卑き兄弟」と、おかしな言い方をしています。これは社会的に低いという字と同じ字ですけれども。しかしこの「卑き」というのはそういった

「卑しい身分である」

というような意味と、この場合、

「貧しい」「心の貧しい」「病のために弱っている」「迫害を受けて苦しんでいる」

とか、いろんな意味の「卑き」という意味があるんでしょう。

おのが高くせられたるを喜べ。

この「喜べ」は「誇れ」と訳してもかまわない。

10 富める者は、おのが卑くせられたるを喜べ。

何のことですかね、これ？　詩篇の113篇を見てごらんなさい。５節、６節のところ。４節から読みますと、

「4 エホバはもろもろの国の上にありてたかく その栄光は天よりもたかし 5 6 われらの神エホバにたぐうべき者はたれぞや 宝座をその高処にすえ己をひくくして天と地とをかえりみ給う 7 まずしきものを塵よりあげ乏しきものを糞土よりあげて 8 もろもろの諸侯とともにすわらせ その民のきみたちと共にすわらせたまわん」（詩篇113・４～８）

と。即ち、神様は己をひくくして、卑いところへ降りてきて、そして高くあげてくださる。

「誰か、神ヤハウェーにたぐうべき者ぞ、坐しては高処におり、かえりみては

卑きに降るもの」

と、原語ではそういう。

「かえりみては卑きに降るもの」

とは神様ですよ、この詩篇の。「かつは天に、かつは地に」即ち、

「且つは天にありて高きところに居り、且つは地に降りて、かえりみては卑きところに降り給う、その神はつまらないものを塵よりもたげ、貧しき者を糞土よりあげて、もろもろの侯と共に坐らせるんだ」

と。キリストは降りてきて、私たちの間に立った。そして、我々の間に幕屋を張ってくださった。即ち、これは「受肉」です。どん底に降りてきて、キリストは私たちを今度は高くあげてくださる。ただ、上から引き上げるのでなくて、キリストは卑く降りてきて、我々を高くあげ、そして、

「富める者、心のおごったような者は、逆に己が卑くせられたるを喜べ」

と。それらがキリストによって逆に卑くされて、

「ああ、私は今までは思い上がっていた。今度は私は本当の人間になりました」

と。社会制度が引っくり返されてしまって、いわゆる貴族とか何とかいったのが平民になってしまった。その貴族から平民に落とされた人たちが、

「ああ、私は今度は本当の人間になった」

といって喜ぶならば、その人は本当です。そういった意味で、

10 **富める者は、おのが卑くせられたるを喜べ。そは草の花のごとく過ぎゆくべければなり。**

富んでいるというような、高ぶっているというような事態は、草の花の如くに過ぎゆくからである。そういった地上の虚栄や虚偽に囚われていたらばダメだ。これはみんな過ぎゆくからだと。

11 **日出で熱き風**

「熱き風」というのはアラビヤの乾いた熱い風のことをいう。

風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗しき姿ほろぶ。富める者もまた斯くのごとく、その途の半にして己まず消え失せん。

凋落してしまうよと。なんか思想の連絡がないようですね。この8節から9節にいきなり飛んできてしまって。

「これは誡めだから」

と言うような人もあるけれども、まぁいいです。

●生命の冠冕

12 **試錬に耐うる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛**

する者に、約束し給いし生命の冠冕を受くべければなり。

試煉に耐える人は幸福である。この「幸福」という字は「マカリオス」という字で、分解すると「メエ・ケリオ」という字で実は「不滅」という意味です。

「霊の貧しき者は幸福なり」

という「幸福」という字は、

「不滅、それは滅びない」

という意味から幸福というので、なかなか含蓄のある言葉です。

「試錬に耐える者は不滅である、幸福である」

と。これは勿論「幸福である」でいいけれども、幸福という言葉の意味はそこから来ているということをちょっと今、申し上げたまでです。

之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛する者に、約束し給いし生命の冠冕を受くべければなり。

即ち、試煉に耐えるということに及第して、善しと嘉みせられた時には、神様は、主は生命の冠を与えてくださる。

これはもう散々、ヨハネ黙示録に出ている。七つの教会に宛てた手紙の時に、

「勝ちを得るものは、勝ちを得るものは」

と書いてあるでしょ。試煉に耐えて勝ちを得る者はみんな、生命を与えることを約束されている。大体においてみんな書いてあるでしょ。例えばヨハネ黙示録2章7節に、

「7耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝を得る者には、われ神のパラダイスに在る生命の樹の実を食うことを許さん」（黙示録2・7）

それから、スミルナの教会に宛てているのが2章10節、

「10なんじ受けんとする苦難を懼るな、視よ、悪魔なんじらを試みんとて、

「悪魔」という字は、「試みる者」という言葉で言い表わすこともある。

汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあいだ患難を受けん、なんじ死に至るまで忠実なれ、然らば我なんじに生命の冠冕を与えん。」（黙示録2・10）

今そこに出てきたのと同じです。それから、サルデスの教会に宛てたのが3章5節、

「5勝を得る者は斯くのごとく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落さず、……」（黙示録3・5）

あと、「生命」という言葉がなくても、みんなこれは

「永遠の生命」

に通ずる事態がそこに与えられる。聖書は、人間が最も欲しているところのもの、即ち、永遠の生命を与えようとしている。それは神の聖旨を行ずる人たちにです。御利益としてではない。神の聖旨を行ずる者たちにです。

13 **人誘わるるとき『神われを誘いたもう』と言うな、神は悪に誘われ給わず、**
又みずから人を誘い給うことなし。
神様が誘うなんて思ってはいかんよ。この「誘う」という字は「ペイラゼータイ」という字です。あの「主の祈り」の、
「試惑に合わせ給うな」
という、「誘惑に」というあの字です。

14 **人の誘わるるは己の慾に引かれて惑さるるなり。**
「慾」というのはなかなか悪い内容をもって、この場合使っている。要するに、自分のいろんな物欲、情欲、いろんなものです。そういったものに引かれて惑わされる。

15 **慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。**
これはロマ書にあるようなわけです。罪が完成すると死を生む。この「死」というのはただ肉体的な死じゃないですよ。これは本当に永遠の生命から脱落してしまうような死です。その死を生む。

16 **わが愛する兄弟よ、自ら欺くな。**17 **凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、**
この「賜物」という字は、「ドーシス」という字で、「カリスマ」という字ではない。「凡ての善き賜物」とは「ドーレイマ」「恩沢」です。
上より、もろもろの光の父より降るなり。
さっき「栄光の霊」と言いましたが、
父は変ることなく、また回転の影もなき者なり。
この「回転の影もなき」といったのは、天体のことを想ったからです。春夏秋冬変わるでしょ。天体の移りゆき、気候の変化、そういった明暗の交錯するような事態をさして、そういった光。この
「父という光」
は、そういった影がさしたり、暗くなったり、消滅したりするような、そんな光じゃない。これは不滅の光だから。そこでこの父というのは、
「変ることなく、また回転の影もない」
と言った。霊界の光は、どんな事態に対しても絶対に常に常恒的に光っているという意味です。

18 **その造り給える物の中にて我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに真理の言をもて、我らを生み給えり。**
初代教会の聖徒は「初穂」です。使徒たちまた使徒に次ぐ人たちは初穂ですから、
「我らを初穂のごとき者たらしめんとて」
教会の歴史の初穂ですからね。
「御旨のままに真理の言をもて、我らを生み給えり」

「聖旨のまま」という字は「ブーレセイス」という字です。

「キリストという真理の言葉をもって我らを生み給えり」

と。我々が本当に新しく生まれたのは、このキリストの真理をもってという。

「我は真理なり、生命なり、道なり」

と言い、そしてこの真理であるところの言葉、

「わが言葉は霊なり、生命なり」

と言われたこの「真理の言葉」ですね。要するにその内容はキリストのことです。

「御旨（みむね）のままに、キリストをもって、私たちを新しく生んでくださった」

と。ヤコブ書でそういったところに、「キリスト」という言葉を、まぁパウロなら持ってくるところでしょうけれども、「真理の言葉」なんて言い方をしていますけれどね。

●神からの試煉・サタンの誘惑

それで一応、言葉の解釈はお終いで、今日はこの「試煉」というわけです。これはギリシヤ語の「ペイラスモス」「試し」「試惑（こころみ）」という字です。かつて、『聖霊の翼の蔭に』〔『聖意体現――主の祈り――』（１９５９年、曠野の愛社）に改訂〕に書いておきましたから読んでみます。

> 「「試惑」（peirasmos）は試練と誘惑の両面をもつ事態と解するのが適当であろう。それは神より来たる直接的な試練も、この罪の世という環境にあっては、サタンの誘惑の面を有する。」

神様からの試煉も、これは罪の世というこの環境の中では、サタンの誘惑の面をも有するからです。さっきの

> 「誘いは神から来ると思ってはいけない」

と書いてありますが、そうでなくて、この試惑というものは神から来るのですが、それは罪の世という境遇にあっては、サタンの誘惑の面も持っている。これはヨブが第一そうです。ヨブの試煉も、これは神様がサタンという一つの道具を――道具といってはおかしいですが――そういう手段を通して、神様はヨブを試煉（こころみ）ておられる。

キリストもサタンとの一騎討ち、サタンとの「荒野の試惑」というでしょ。荒野の試煉。これは神様から来ている試煉なんですが、しかしサタンの誘惑として、そこに現われて来ている。誘惑の面をもっているでしょ。

> 「あたかも光が物体にあたるとき、その半面に暗い陰を生ずるが如くである。また、サタンより来る直接の誘惑に対しても、それはちょうど、暗い魔手のような雲の上から、太陽の光がこれを貫こうとして射しかかっているように、神の光がつねに護っているからである。」

即ち、さきほど、ヤコブが言ったサタンの方の誘い――自分の慾であろうと、サタンの

慾であろうと――誘いという、これも勿論、神から来ているんじゃない。勿論、神から来ているんじゃないけれども、その誘いを、どうかして、そいつを地から救ってやろうとする光が別な面にある。誘いが影ですから。まぁ私はそう書いた。

「それはちょうど、暗い魔手のような雲の上から、太陽の光がこれを貫こうとして射しかかっているように、神の光がつねに護っている」

誘いに対して、この誘いから、その暗い影から救い出そうという光を見なくてはいかん。誘いを見つめていたら、誘いの中に閉じ込められてしまいます。だから、これはどっちみち、光の方に自分を持っていかなくてはいかん。

「しかし、試練の誘惑の現実相は、そのような相関的なものであっても、この祈の直接的な意識は、サタンの誘惑につり込まれないように護ってください、である。「試むる者」(ho peirazon)という「試惑」と同語根の語がサタンの意に用いられている（マタイ４・３）。即ちイエスは、御霊に導かれて荒野に出でゆき、そこでサタンに「試みられた」（この動詞も同語根。マタイ４・１、マルコ１・13、ルカ４・２）。イエスが四十日四十夜の断食中の試惑は、サタンの執拗な誘惑であった。しかもこの試惑のみちびきをなしたものは「御霊のみ」であった。それはヨブ記に於けるサタンの試惑（こころみ）が、神の許容（ゆるし）のもとに行われた消息と、相通ずるものがある。否、それよりも烈しく、聖霊に完全に満ちていたイエスを、サタンが妬みを起こして試みたのである。高次の立場からの神の試練――聖霊による――であった。」

これがその『聖霊の翼の蔭に』〔七、神護救済の項〕で、

「我らを試惑に引き入れ給うなかれ」

という、その「ペイラスモス」という言葉の註解を今ちょっとご紹介したわけです。私たちがここでヤコブが「試煉に耐うる者は」ということ、

「忍耐をもって試煉に打ち勝つ」

そしてまた、

「試煉に対して喜び、歓喜を持て」

といったことの、その「試煉に対して歓喜を持つ」とか、

「試煉に耐える」

ということは、さきほども少し出てきて、既に説明したようなものですけれども。そこに「神は光の父」と書いてありますが、この

「栄光の霊」

がなんといっても、

「力ある光の霊というものを私たちがうちに宿す」

ということが極めて大事なこと。もしこれがなかったならば、本当に試煉に打ち勝ち、

「全くかつ備わりて欠くる所なからん」

なんて、そんなことは到底できるものじゃない。

●試みをへたる活ける石

イザヤ書の28章16節に、

「16**このゆえに神エホバかくいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその基（もとい）となせり。これは試（こころみ）をへたる石とおとき隅石（すみいし）かたくすえたる石なり。これに依頼むものはあわつることなし。**」（イザヤ28・16）

ここに「試をへたる石」という言葉があります。この「**試（こころみ）をへたる石**」はどういう石かというと、ペテロ前書2章4節に、

「4**主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。**

「隅の首石（おや）」という言葉がありましたが、ここでは「貴き活ける石」とある。

5**なんぢら彼にきたり、活ける石のごとく建てられて霊の家となれ。これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲（いけにえ）を献げん為なり。**6**聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石（おや）を我シオンに置く。之に依頼む者は辱（はずか）しめられじ』とあるなり。**

これは正に活ける石、リヴィング・ストーンです。

7**されば信ずる汝らには尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者（いえつくり）らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、**8**『つまづく石、礙（さまた）ぐる岩』となるなり。彼らは服（したが）わぬに因りて御言に躓く。……」**（ペテロ前2・4～8）

こういうわけで、イザヤ書だの、それから詩篇の言がここでもってペテロにはちゃんと浮かんできているわけです。また、キリストが、

「**この石に躓く者は倒れる。また、この石は倒れてその人を砕く**」

なんてことを言っています。

「**活ける石**」「**躓きの石**」「**試みをへたる石**」

という。この石は言うまでもなく、キリストです。

「**その石に活ける石の如く建てられて霊の家となれ**」

というんですから。私たちの土台石は、このキリストという土台石。その上に建てられるところの家は、霊の家である。だから、どんな波風が来ましても、この岩、千歳の岩の上に立つところの霊の岩、霊の家ですから、これは一切の嵐に対して倒れない。その「試みをへたる石」というのは、しかしながら、この石はただ固くてそして頑固でという、そんな石じゃない。

それはどこで見るかというと、ヘブル書で見ればわかる。どういう石かというと、ヘブル書の４章15節、

「15**我らの大祭司は我らの弱を思い遣ること能わぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給えり。16この故に我らは憐憫を受けんが為、また機に合う助けとなる恵みを得んがために、憚らずして恵みの御座に来るべし。**

1**凡そ大祭司は人の中より選ばれ、罪のために供物と犠牲とを献げんとて、人にかわりて神に事うることを任ぜらる。2彼は自らも弱に纏わるるが故に、無知なるもの、迷える者を思い遣ることを得るなり。**」（ヘブル４・15～５・２）

これであります。この「思い遣る」という言葉は「シムパテオ」という字で“simpathise”と同じ字で、

「同じ心となる」

という意味です。主は私たちと同心となってくださる。私たちの弱き時には、弱き心を、同心を、同じ心をもつところの者。同情、同心という――日本語で同情というと、少し言葉が軽くなりますけれども――同心をもって、同じ心をもって私たちの一切の病患、苦難を自分のなみやとし、我らの苦難を苦難とし悲哀を悲哀とし、というのがこのキリストという活ける石なんです。「石」という言葉は、なんか非常に冷たい感じを与えますけれども、この「活ける石」は

「試みをへたる活ける石」

というのは、キリストはみんな試煉を同じく経たんだから。しかしそれがキリストにおいては、罪という方に自分が持っていかれなかった。勿論、可能性はあったけれども、それを可能ならしめなかった。

罪の可能性はキリストだってあったですよ。でなければ、あんな山上の垂訓のような、うがったことを仰るわけにはいかない。人間の心理は――心理学者としたって、キリストは素晴らしい心理学者です――そういった罪への可能性は勿論あったが、それを可能ならしめなかった。即ち弱さ、苦しみ、何でも一切を人間と同じように受けた。「スィンパテオ」即ち「思いやる」ことができた。キリストほど思いやりの深い人は――彼も共に泣いたです――あのマリヤの兄弟のラザロが死んだ時に、可哀相でキリストも泣いた。けれども、同じく泣いても、同じく涙を流しても、彼は

「ああ、どうもそれは悲しいことでしたね」

と言って、ただ同情しておしまいじゃない。キリストの同情というのは、その悲しみを同じくして、ラザロを甦えらしてしまった。即ち、同じ苦しみ、悩みから、みなこれを勝利へ、喜びへ、歓喜へと展開するところの実力をもっている。この実力は、「試煉をへたる石」の内容は何かといったら、それが

「神の霊」

であります。

●活ける御霊の実存

石は、金剛石〔ダイヤモント〕みたいで、炭素の結晶みたいです。炭素の結晶、金剛石は火に燃えます。金剛石というのは火の結晶みたいです。火が結晶している。冷たいように見えるけれども、あの素晴らしい光は実は火の性格を持っている。金剛石は素晴らしい光を持っている。冷たいようだが実は火の性格を持っている。石という表現をもって現わされている「試みの石」は冷たいようだが、非常に熱い同情をもっている。情けを持っている。そして、一切の苦難、病患、欠陥というものをみな「全き」に展開してくださるところの力を持っている。

これが即ち

「試みをへたる石」

キリストでありまして、この「試みをへたる石」はサタンとの荒野の一騎討ちで、どのようにしてこの試煉に勝ったか。これはどこまでも神の霊をもって聖なる意志を体した。聖旨を体し、この聖なる霊を宿した。神の意志を体し、そして聖霊を宿すという、この二面です。神の聖旨をただ体するといって、観念的に体する体し方があるけど、それでは力にならない。また、神の霊を私（わたくし）したらサタンになってしまう。この霊が、神の霊であるということと、神の意志、聖なる意志であるということが一つである。

聖霊は必ず神の意志を受けとっている霊を聖霊という。まぁそれだから、一語で聖霊と言ったっていいんですけれども、この神の聖旨を受けとって、そうしてその実質は神の霊である。こういうのがあらゆる試煉に対して勝ち得るところの、活けるキリストという御霊の実存であった。だから、これが私たちの弱きを、一切を思いやることができて、これを救い上げることができる。

我々はこの試煉に勝つというのは、いくら信仰で頑張ったって、いわゆる修練したって、やせ我慢したって、勝てない。本当の勝利というのは、この試煉に対しては、同じ試煉を受けて、そうして完全にそれに打ち勝ったところのキリストを私たちが宿すことによって、即ち、栄光の霊を宿すことにおいて、光の霊を宿すことにおいて、四季回転することなき神の不滅の霊をキリストにおいて宿すことにおいて、この試煉に勝っていく。そうなってくると、私たちはもう試煉というようなものに、

「さぁ、どうしたらよかろうか？」

といって、いちいち何か七面倒臭く考えたり、苦しく思ったりする必要がない。いろんなものが来たら、そんなものを見る必要がない。これはもうキリストに祈ることです。

だから、祈りが非常に大切なのです。聖書の箇所は、あげたらきりがないから止めますけれども。目覚めて常に祈ることが如何に大切であるか。マタイ伝26章41節、

「41 **誘惑（まどわし）に陥（おちい）らぬよう、目を覚ましかつ祈れ。実に心は熱すれども肉体よわきなり**』」（マタイ26・41）

心、「プニューマ」は熱するけれども、霊は熱するけれども――この「心」は「霊」という字です――肉体は弱いから、罪のとりこになる。法の下にある私たちはいよいよ誘惑に陥らぬように、目を覚まして、かつ祈れとキリストは言われた。これはゲッセマネの祈りのところでしょ。

「御意のままに成し給え」

と、キリストが祈っている間、ペテロとゼベダイの子ヨハネを伴いて、祈ったところが、二人は眠くなって寝てしまったでしょうが。

「[43]復(また)きたりて彼らの眠れるを見たもう、是その目疲れたるなり。[44]また離れゆきて、三たび同じ言にて祈り給う。」（マタイ26・43～44）

と。だから、朝起きて夜寝るまで、いや実に寝てもなお、夢の中で四六時中、私たちの霊は――私たちの肺はどうですか、肺はいつか呼吸を止めますか。肺は眠っていても呼吸している。私たちの自然的生命を司っているところの肺というのは眠っていても呼吸している――私たちの霊は何をしていても、これは祈りの世界で呼吸してなくてはいかん。

霊が即ち呼吸をして、そして眠っていても、いや眠っている時は――ある意味においては――いよいよ霊の世界は目覚めて、呼吸をしている。即ち、私たちの霊が目覚めて、呼吸として祈っているということが――「祈っている」ということは

「キリストとの交わりを持つ」

ということですよ――この試みをへたるキリストという活ける石に、深く思いやることができてそれを助け突破することができるキリストという金剛石みたいな、火みたいな石に、これに我々は祈りをもって常に連なって、そこから栄光のみ霊、光を受けている。そうしたらば、この試煉に対して勝ち、また試煉を神の栄光の現われる機会として、歓ぶことができる。

●聖書は大ドラマ

イエスの力は、神の力はこういう時に現われていくんだぞと。如何なる偉大な、事業、作品、芸術、そういったものが艱難を通さないで出てきたか。安閑としてそんなものは出てこない。皆それは艱難、試煉を経て出てくる。即ち、神は艱難、試煉を機会として、これを神の業(わざ)の現われる機会として、喜び勇んで進んでいく。

さすがのベートーヴェンも、音楽家がつんぼになったら、一時は絶望した。ドナウ河に身を投げようと思った。けれども自分は、肉の耳ではなくて霊の耳をもって天来の音楽を聴く、その角度から貧しき者、可哀相な人たち、悩める人たちを慰める音楽を創作するのが自分の使命であると。音楽は、その意味において自分の凡てであるということを、しっかり受けとってからは、彼はそこから立ち上がった。

ベートーヴェンは、試煉を歓喜として、最後にはの第九シンフォニーという驚くべき歓

喜の絶叫をもって終ったではないですか。最後の死ぬときには、3月26日か、春雷が鳴った。友達に、

「友よ、喜劇は終ったよ」

と言った。

「喜劇は終った、汝ら喜べ」

と。自分の人生を喜劇と言った。

ダンテも20年の苦難を通して、血をもって書いたところのあの『神曲』を

「コメディア」「喜劇」

と言ったじゃないですか。真に艱難と闘った人は、それを喜劇と言った。即ちそれは喜びと勝利と歓喜と讃美に終っているから喜劇という。私たちは、

「聖書は大ドラマだ」

という。聖書は大きな、試煉において書かれたところの大ドラマです。その中には涙あり血あり、惨憺たるイスラエルの歴史、また、使徒たちの殉教の歴史です。それは深刻な歴史。しかし、終りはしからず。ステパノも歓喜をもって、天界に逝った。

ヨハネの黙示録は偉大なる、これは大喜劇をもって、大讃美をもって終っている。大讃美をもって、藤井先生も

『羔（こひつじ）の婚姻』

というようなわけです。

そういうわけで、人生は歓喜、本当の意味における喜劇です、本当の喜びの。だから試煉は、罪の世であり、サタンがおり、また、罪の身である、この現実においては試煉なき人生なんてものはありはしない。試煉がなかったら、これは人生を誤魔化している。真剣に生きれば、試煉は必ずある。これがどういう角度から、どういう複雑な構造をもって来ようが、しかし、それを今言ったこの生けるキリストを、この躓きの、試みをへたる石をわが中に置けば、この石が叫ぶです。

「かの徒輩（ともがら）、黙（もだ）せば石叫ぶべし」

石からアブラハムの子は起きる。何故、石というでしょうか。面白いですね。ユダヤは石っころがゴロゴロしているから、荒野だからですね。そしてその岩から水が迸り出たり。

「この石は即ちキリストなり」

と、パウロが言ったではないですか。

そういうわけで、私たちはこの千歳の岩によって、本当の歓喜をもってこの試煉を突破することができるわけであります。終ります。